



三郷町野井
いちかわ あきら
市川 彰さん (71歳)

□プロフィール

版画家で福祉大学の非常勤講師。市俳句大会の実行委員長と(一社)みさと愛の会の理事を務める他、NPO法人いわむら一斎塾に所属して佐藤一斎記念館(仮称)の整備事業に尽力している。



▲木の木に彫刻刀で絵を彫る(撮影:堀洋美)

木製の板に彫刻刀で文字や絵を彫って版を作り、絵の具を塗って紙に転写する版画。昭和20年代から学校教育にも取り入れられていて、市子ども版画コンクールには、毎年2000点以上の応募がある。同コンクールで、19年間審査員を務めているのが、版画家の市川彰さんだ。「色や彫り方、構図など、さまざまな表現方法があるので、見ていて楽しい」と版画の魅力を語る。

元々、版画の収集が趣味だった市川さんは、市外の版画会を訪れたことをきっかけに、40歳で版画を刷り始めた。2年連続で市美術展の市展賞を受賞し、全国公募展でも最高賞を獲得。その後、浮世絵版画を収蔵する(公財)中山道広重美術館と(一社)日本板画院の理事に就任した。

「日常を見つめ直すことができ、版画は恵那の文化であり、継承していくべきもの」と話し、えなえーるや市民講座でワークショップ

「手がかるけれど、一度彫れば何度でも刷ることができる楽しさと、たくさんの人に贈ることができる良さを伝えたい」と話す市川さんには、版画に対する熱意があふれている。

恵那を版画のあるまちへ 版画のさまざまな企画に挑戦

木製の板に彫刻刀で文字や絵を彫って版を作り、絵の具を塗って紙に転写する版画。昭和20年代から学校教育にも取り入れられていて、市子ども版画コンクールには、毎年2000点以上の応募がある。同コンクールで、19年間審査員を務めているのが、版画家の市川彰さんだ。「色や彫り方、構図など、さまざまな表現方法があるので、見ていて楽しい」と版画の魅力を語る。

元々、版画の収集が趣味だった市川さんは、市外の版画会を訪れたことをきっかけに、40歳で版画を刷り始めた。2年連続で市美術展の市展賞を受賞し、全国公募展でも最高賞を獲得。その後、浮世絵版画を収蔵する(公財)中山道広重美術館と(一社)日本板画院の理事に就任した。

「日常を見つめ直すことができ、版画は恵那の文化であり、継承していくべきもの」と話し、えなえーるや市民講座でワークショップ

「手がかるけれど、一度彫れば何度でも刷ることができる楽しさと、たくさんの人に贈ることができる良さを伝えたい」と話す市川さんには、版画に対する熱意があふれている。



その他の話題もウェブサイトに掲載

10/22

4年ぶりに観客を入れて開催
東野歌舞伎の公演



東野歌舞伎保存会による東野歌舞伎公演が行われ、地元住民ら300人が来場しました。東野小学校歌舞伎クラブの演技や、町内各団体の代表者などが出演するお目見得だんまりもあり、会場からは多くの声援が贈られ、おひねりが飛びました。

10/21

まちなか市、栗フェス、コーヒーフェスで駅前がにぎわう



恵那駅周辺で、まちなか市とえな栗フェス、コーヒーフェスが開催され、市内外から1万3千人が訪れました。まちなか市では、恵那東中学校の1年生が屋台を出店。栗フェスでは、栗きんとんやモンブラン、栗フェス限定スイーツを買い求めて長蛇の列ができました。

11/4

恵那峡を巡るONSEN・ガストロノミーウォーキング



大井ダム完成100周年を前に、恵那峡周辺を巡るONSEN・ガストロノミーウォーキングが開催されました。参加者は、大井ダムの歴史を学びながら、六つのポイントで五平餅や栗きんとん、ワインなどの特産品を堪能。ゴール後は温泉に浸かり、体の疲れを癒やしました。

11/3

丹精込めて育てた巣を出品
くしはらへボまつりを開催



くしはらへボまつりが4年ぶり開催されました。へボの巣の重量を競う「全国へボの巣コンテスト」では、市内外のへボ愛好家が自慢の巣を出品し、6,190gを記録した巣が優勝しました。地元特産品の販売もあり、へボ五平餅は、行列ができるほどの人気ぶりでした。

11/5

笑顔があふれた
いわむら城下おかげまつり



爽やかな秋晴れの中、岩村本通りでいわむら城下おかげまつりが開催されました。フリーマーケットやまんぶく横丁、子ども横丁などがずらりと並んだ他、岩村城女太鼓と安岐太鼓による迫力ある演奏などもあり、訪れた人たちは秋の城下町を満喫しました。

11/5

放水体験に消防士との力比べ
消防フェスを初開催



市消防防災センターで、恵那消防フェスティバルが開催されました。放水体験やミニ消防車の乗車、消防士との綱引き対決などに子どもたちは大喜び。煙が充満した煙迷路を体験した足立翔生くん(大井町)は「何度も同じ所を回ってしまって難しかった」と話しました。